

# 池田文書の研究 (44)

## 医師の書簡 (その3)

### 池田文書研究会

#### [31] 大野松齋の書簡

大野松齋は秋田藩出身の著名な種痘医。文政2年生まれ明治21年7月17日没。長崎でモーニッケに種痘を学び浅草にて開業。皇后始め華族や平民に至る迄広く種痘を施す。享年70。(1819-1888)

1 明治 年1月9日 (727)

奉拝見候、益御万福被為渡奉敬賀候、陳ハ明宮様御種痘之儀、愈明後十一日午後一時ニ被遊候段御達し奉承知候、将又痘苗ハ内務省より奉献ニ相成候段是又奉拝承候、偕赤坂御所御女官九十三名両日ニ割種痘申上候様被仰下是又承知仕候、但し明十日ハさし合有之候間明後十一日中山様退参遊候赤坂へ相廻り申上度、此段御含置被下度、残りハ十二日午後又々参殿申上候積り、左様御思召被下度先々件拜答迄奉差上候也、頓首

一月九日認 大野松齋  
池田謙<sup>(ママ)</sup> 齊様 閣下

二白、忝恒徳同道採漿為仕候間、此儀御含ミ其御向へ被仰立候様是又奉願候也

2 明治 年1月23日 (729)

新禧奉恭賀候、甚寒之節益御安健被為渡奉大賀候、尔来心外之御無沙汰恐入、且御帰府後不奉伺誠ニ以恐縮、于時小家本年種痘日月水金曜日と相定め候、右日附札差上候間御懇意様方へ御分与御差図奉願候、諸余拜昇万謝可申上候也、頓首

一月廿三日 大野松齋  
池田様 侍史

#### [32] 大野恒徳の書簡

大野恒徳は大野松齋の嗣養子。弘化3年生まれ

明治36年没。種痘医。陸軍一等軍医正。享年58。(1846-1903)

1 明治 年2月22日 (773)

御尊書<sup>(ママ)</sup> 洛手拝読仕候処、有栖川宮様御種登<sup>(ママ)</sup> 件奉畏候、来廿八日午後三時参上仕候間可然御指揮被成下度候、将又過日は結構之御品沢山頂戴被仰付、千万難有奉謝候、いつれ不日拜趨万縷可申述候、早々頓首

二月廿二日 大野恒徳  
池田大先生 閣下

2 明治 年5月20日 (772)

日々暖和相成候処益御清適奉賀候、陳は此度は久迹<sup>(ママ)</sup> 宮殿下并ニ伏見宮殿下種登<sup>(ママ)</sup> 仰付難有奉謝候、幸去ル土曜採携之牛<sup>(ママ)</sup> 当ニて左右四顆ツ、種接仕候間此段為念申上候、尚此上宜敷御指揮被成下度奉願候、早々頓首

五月廿日 大野恒徳  
池田先生 閣下

二白、此品到来ニまかせ御進呈仕候間御咲留被成下候、早々以上

#### [33] 岡玄卿の書簡

男爵岡玄卿は明治17年より侍医、32年より侍医局々長を勤める。玄卿の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に4通、追加として『日本医史学雑誌』第56巻第4号に2通記載に付省略。

#### [34] 緒方惟準<sup>これよし</sup>関連の書簡

緒方惟準は緒方洪庵の次男。陸軍医務制度設立者の一人。緒方病院々長・大坂慈恵病院々長。

惟準の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』

上巻に18通掲載。未掲載分を記す。

又関連として惟準の弟四郎・重三郎・母八重子・妻吉重・親戚緒方道平・惟準執事の書簡を掲載する。池田(入沢)謙齋は幕府奥詰医師池田多仲の嗣養子となるに際し、一旦緒方洪庵の養子となり、その後直ちに池田家に入籍している。従って緒方家と池田家とは縁戚関係にある。

### ① 緒方惟準の書簡

この書簡は出・受信人不明であるが、文面より惟準が池田謙齋に宛てたものと考えられる。

19 明治(元)年 月 日 (3651)

副白

此有馬は野生身上之進退を決断候(欠)土地、御一笑可被下候、抑明治元年八月和蘭国より帰朝、横浜ニ着早々新政府より之召有之、之ヲ避ケンカ為メニ横浜ヲ去り帰坂候処、又々京都大政官より嚴重之内沙汰アリ、依テ当地ニ陰レ潜ミ居リ候処、同姓拙齋<sup>(1)</sup>ニ其罪及ボン、大坂ニ於テ開業差留ニモ可致場合ニ付、此地ニ拙齋参リ野生ニ□(欠)懇願(後欠)

(1) 緒方拙齋 幕末・明治期の蘭方医。緒方惟準の妹八千代の婿養子となり、文久2年洪庵が江戸に出た跡適塾を継ぐ。明治20年惟準と共に緒方病院を設立。明治44年没。享年78。(1834-1911)

### ② 緒方四郎の書簡

四郎は洪庵の三男。弘化元年生まれ明治38年没。東大病院薬局取締。明治20年緒方病院設立により薬局長・事務長を勤める。享年62。(1844-1905)

1 明治 年12月30日 (611)

(欠)啓、其後ハ大ニ御無音(欠)候段平ニ御海恕可下候、扱以御蔭眼病追々快方ニ至り、万々難有奉厚謝候、早速御伺可申之処、先達より風邪ニ当られ、今以て時々悪寒有之、夫故御無沙汰仕候、此段幾重ニも御仁免可下候、何れ来一月ニ相成候

ハ、早々相伺可申候、此ハ余り軽少之至ニ候得共年末之御印迄候、御笑留被下候ハ、本懐之至ニ奉存候、草々頓首

十二月三十日

尚々御尊母様初メ御家内様へよろしく御伝音奉願上候、草々

池田謙<sup>(ママ)</sup>輔様 玉床下 緒方四郎

### ③ 緒方重三郎の書簡

重三郎は洪庵の八男。安政5年生まれ明治19年3月6日没。司法省御雇いポアソナードに師事し内務省取調局御用掛。享年29。(1858-1886)

1 明治 年12月19日 (610)

拝啓、愈御清穆奉賀候、御多忙中毎々御来診を辱フシ難有奉存候、生義以御蔭漸次快方ニ赴、最早熱も全ク相去り悪寒も覚不申、此様子にてハ不遠快癒之事ト喜悦罷在候、然るニ腸胃之工合何分よろしからず、過日御来診相仰候後、便通たへて無之、依て一昨日溜腸相行、軟便少々相通シ候へとも、尔来腹鳴放屁等ノミにて一向催便之気味無之、何分不愉快千万ニ付、本夕又々溜腸相施候覚悟ニ御坐候、就てハ溜劑ハ是まで石鹼水(尤モ微温)相用居候へとも右にて不苦候哉、或ハ微温湯ノミ之方可然歟御指揮相仰度、将食料之義も尊論を奉シ、猶今スープ、牛乳、ウワユ(粥ノ)并ニ葛湯ノミ相用居り、今暫ク依然右四品相用可申哉、又タ服薬ハ如何可仕哉、外ニ何も相用不申候テ不苦候哉如何、彼是御繁用之処御手数之義願出恐縮之至ニ候へとも、右数件可否御垂示相仰度、猶ホ気分よろしき節ハ室内散歩いたし不苦候哉、是亦御示諭奉願候、草々頓首

十二月十九日 緒方重三郎 拝

池田国手 台下

(注) 関連として『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に緒方惟準の書簡(第630号)あり。明治18年頃のものか。

### ④ 緒方八重子の書簡

緒方洪庵の妻。億川百記の娘として文政5年生

まれ天保9年結婚。7男6女を産む。明治19年2月7日没。享年65。（1822-1886）

1 明治3年8月25日 (636)

御多用毎度御心ニ掛ケさせられ細々との御書状有難早々拝見仕候、はや今年も秋のさ中も過朝夕はひやかに相成候へとも、先々其御地にても御惣よふ様方御揃られ御機嫌よく入らせられ候半と何寄何寄御芽出度嬉敷存上まいらせ候、二ニ私方も相不替両家とも一同無事ニ暮候まゝ呉々も御ゆるし遣され候、扱十郎<sup>(1)</sup>事在府中は毎度上り何角と御深切ニ御世話被下、金子なども借用願上有難深くも御礼申上候、同人事も四郎道々<sup>(ママ)</sup>婦坂致、只今ハ毎日エイノ学<sup>(ママ)</sup>構え仏人も御やといニ相成居候ゆへ其方へかよる居申、先只今の内ハ十郎、十二郎<sup>(2)</sup>、十三郎<sup>(3)</sup>三人とも仏人の所え遣申、又追々に三人とも其御地ニ遣候まゝよろしく願上まいらせ候、此度の御書状ニ正殿方にて十郎金子借用致候由、其義ハ四郎より出帆の節横浜にて十郎ニ借用金一才書付致させ、其書付を箕作え相願、堀越方より金子御受取被下それぞれに御返済下され候様書状相添願遣候由ニ御さ候間、正殿へもはや此節は御返済被下候半と存候、御まえ様ニても御取替遣され候分ハ箕作氏より御返上致呉られ候義ニ御さ候、いまた御受取ハ遣されず候哉、さやうならハ御ついてニ秋平<sup>(ママ)</sup>様へ此由御咄被下恐なから御受取遣され候、十郎事も昨年六月よりよほどの金を遣申候、扱々金の入にハ一入困り居まいらせ候、御遠さつ遣され候、末筆なから御母公様へも呉々もあつく何角の御礼やら御あいさつ願上候、過し頃よき十三四才斗の男子見受候へハ養子ニもらい受度、世話致呉ト毎度御申越遣され、私事もあれかこれかとせんきも致居候へとも、よき子ハ中々相談六ヶ敷、先方より頼参り候者ハ私の気ニハ入不申、トント、トント思わしからず、追々延行致申御返事もさし上不申、憚なから此由仰上られ遣され度、其内ニハ見出御世話申上度存居候、御まえ様ニハ其後いまた御子様ハ御出け被成不申哉、とふそはやく御もうけ可被成、何分子ハはやくなくてハ間ニ合不申、私方の孫子も御蔭さまにて両家とも大丈夫ニ成人致悦居まいらせ

候、九重<sup>(4)</sup>事も此十月にハ安産致申、とふそ男子を祈居まいらせ候、大坂表も先々相かわり候義も御さなく、ホームイス<sup>(5)</sup>も近々御出立ニ相成東京ニ御出、早東横浜より御出帆本国ニ御帰り被成候由ニ御さ候、病院へはエルメンスト<sup>(6)</sup>か申人か参り、相不替盛ニ御さ候、兵武省の病院へもとふからぬ内ニハよき先生か御出のよしニ御さ候、やはりおらした人の由ニ御さ候、申上度事ハふしの山ほとも御さ候ゆへ中々筆ニハ六ヶ敷、又々御めもしのふしニト其時を相楽居まいらせ候、早々芽出度かしく

八月廿五日

緒方隠居

池田謙斎様

尚々時こふ御用心専一ニ祈り上まいらせ候、洪哉<sup>(7)</sup>より御返事もさし上候はつなからま事ニ多用ニ取まされ御無さた斗申上、私より呉々もよろしく御断申上呉ト申居まいらせ候、幾重御ゆるし遣され候、其老御夫婦さまニも大坂御見物かたかた此秋中ニ蒸気にて御出□□候様遣され度御待申上まいらせ候、又々御帰りのせつハ、私事も御同船にて其御地へ参り度ト相楽居候まゝ、かならずかならず御出のほど御待上まいらせ候、めて度かしく

- (1) 十郎（惟直） 緒方洪庵の5男。嘉永6年生まれ明治11年没。幕末フランスへ留学。慶応4年帰国。明治5年ウィーン博覧会事務官に随従しそのまま欧州に留まりイタリアにて病没。享年26。（1853-1878）
- (2) 十二郎 緒方洪庵の6男取二郎。安政4年生まれ昭和17年没。明治15年東大医学部卒業。同校眼科助手。20年緒方病院設立に参加。惟準辞任後緒方病院長。享年86。（1857-1942）
- (3) 十三郎 緒方重三郎の事。前出に付省略。
- (4) 九重 緒方洪庵の5女。軍医堀内利国妻。
- (5) ホームイス オランダ医師ボードイン。明治3年6月大坂医学校病院を退職、帰国の途につく。
- (6) エルメンスト オランダ医師エレメンス。明治3年5月ボードインの後任として来日。

10年帰国。

(7) 洪哉 緒方惟準の通称。

2 明治 年3月7日 (821)

其後ハ存外御無さた斗申上平ニ平ニ御めん御ゆるし遣され候、先々時こふ御障りにあらせのふや、御一同様方御そろい遊し御機嫌よく入せられ、殊に御小児さま方ニも御大丈夫ニモ追々御成人遊され日ましニ御あいら敷嚙々とおし計海山々々御目出度御嬉敷陰ながら毎度御噂斗申上、今一度御見あげ申度トよし重<sup>(1)</sup>とうちよりてハ御噂のミ申上居候事ニ御さ候、扱此度ハ洪哉事出京致、其御家かた様え何か(と)御世話さまニ相成候由、扱々御氣もしさまニ存上候、中ニ(も)謙斎様ニハ別て御多用の御身、御小児様方も大勢成朝夕御せわせわ敷入せられ候御中え心なく御世話さまニ預り、何とも恐入候次第、乍併私事ハ誠に大安心ニテ山々難有深くも御礼申上候、何分宜敷願上候、とふそあまり心配ハ下され間敷御すて置遣され候、末筆ニ相成候得とも毎度四郎事御深切さまニ深く御心配下され、諸事一かたならぬ御世話さまニ相成まつたく御陰さまニテ商売のみちも立行候よふニ相成候由、過日保田氏<sup>(2)</sup>より委敷御申越被下承知仕、早速御礼申上置、存なからいつも病氣にてうちふし、存外御無さた申上御めん遣され候、陰ながら山々御嬉敷幾重もあつく御礼申上候、何分此上ながら御見すてなく宜敷々々願上候、何分御承知の人間、何事ニもまぬけな人物、扱も扱も御遠察可被下候

別申上候、御国元御老人様方ニもますます御機嫌よく入せられ御目出度存上候、過しハ少々御不快ニ入せられ候由相伺、其後ハさつそくと御快方あらせられ候哉、御たよりの節よろしく御加筆願上候、御まえさまニも追々御孫子さまかた御成人被成御世話もやけ候得とも、又々御楽も多御まんそくニ思召候半とおし計御噂斗申上居候、私方も大勢の孫子ニテま事ニにきわしく相楽居候、いろいろと御咄も海山々々たまりおり候得とも、又々其内私事も一応ハ其御地ニ参りゆるゆると御めもし申上度と相楽居候、近来ハマ事ニ病身ニ相成、一切ハもはやトテモ御面会も六ヶ敷と存候得とも、

又々此節にてハ今一度ハ先代のはか参りかたかた御一同様方へ御めもしも候よふと相成申様相楽居候、先ハ御礼やら御伺かたかた早々目出度かしく三月七日

池田御老母様・御夫婦様 おがた 老女  
尚々時こふ御用心専一ニ祈上候、其御地ハ如何候哉、此地ハ昨冬より春ニ成てモ雪のけしきハ無之候、只々風立申時こふもふそろいニテ、存外あたゝかな日もあり、又殊の外ひへひへしく寒つよく覚候日もあり、私ともハ実ニ困り切申候、よし重より文さし上候よふニ申居候得とも、いまた御無さた致居よろしく何角の御礼を申上呉と申出候、又めて度かしく

(1) よし重 緒方惟準の妻吉重

(2) 保田東潜 東京の漢学者。十郎・収二郎が学ぶ。明治10年衛生局三等属。

3 明治(13)年4月13日 (639)

今日ハおこま女出はんニ付、鳥渡御返事かたかた此由申上度、先々其御地にても御一同様方御機嫌よく入らせられ何より何よりめて度存上まいらせ候、毎度謙斎様よりも御まえさまにも御多用之御中ニ御文被下有難、何事も一々能承知いたし居まいらせ候、おこま殿も早々御返し度、いろいろきをもみ候得とも、同人も所見物も致度申、西京へも参り度ゆへ大るニおそく相成申、思召も如何と存候、同人えハ何事も何事もしらせ不申候ゆへ其心持ニテこたこた致居候御事ハ御咄ハ被成間敷候、過日三澤か出京の節ニさし上候文ニモ相認メ候通り、文にてハ万事行届かね、是非とも御めもしさまニテ御相談モ申上度、御咄申上度義在之候まゝとふそ御国元の御老母さまより先ニ御出被下候義ハ六ヶ敷候哉、もはや西京の山々も花盛りニ相成申、今月廿頃にハ吉野の桜も盛りニ御さ候よし、御見物ハ花のある内かよろしく、花がちり候テハ御見物のかゝるも無之候ゆへ御国元の御老母さまニも相成へくハ只今の内ニ御出遊され候へハ、所々御案内申上度と御待申上居候、もはやおいくさまニも追々と御日立被遊、御まえさまニもすこしハ御手もはなれ遊され候テモ御心配無之ト存

候、御夫婦様へよろしく何角之御あいさつ願上候、先ハさしいそぎ早々此由申上度めて度かしく

✍

四月十三日

池田御老母様 御返事御礼迄

緒方老女

4 明治13年5月1日 (635)

毎度御書状戴難有拜見仕候、先々其御地ニテモ御一同様方御機嫌よく入らせられ、何寄々々御目出度嬉敷、扱過しより洪哉事の外々御世話さまニ相成、山々有難深くも御礼申上候、此度ハ御母公様<sup>(1)</sup>ニもよふはやはや御思召立被遊御出ニ相成、御道中も天気まへも宜敷、存外ニ早着ニテ至極御機嫌よく、其後も何の御障りもあらせのふ早束よく日より西京より南都え御見物ニ御出ニ相成申候、よし重事もいまた南部へハ参り不申、かたがた此度ハ私ハ留守はん致、御母公様の御供ハ吉重か参り申、上悦ニ御さ候、もはや明二日ニハ御帰りニ相成申候、呉々も御安心遣され候、然所過日ハ御まゑさまよりも電真御遣ニ相成、又今日阿州よりも伝真参り、とふか御妹子さま<sup>(2)</sup>御ひとりニテ御困りの由、其御母公様ニ阿州の国え御出下され度トのでんしんニ御さ候、さりなからもはや御死去後の御事成、せつ角おもしろく御見物の折からゆへニ、御出のさきへハさし上不申、もはや明夕ハ御帰りの事ゆへ其まゝ私手元ニ御預り申上候、御帰宅後御国へ御出ニも相成候へハ、慥なる者ヲつけ天気まへもよく見合、成丈よき船ニテ御出ニ相成候よふニ致候まゝ、皆な皆な御心配ハ被成間敷候、トモ角も御帰宅の上何角御相談申上候、不及なから何事もよく都合仕候まゝ、御案事遣され間敷候、前文の次第ゆへ御まゑさまの御書状モ其まゝ御預り申上置候、あまり御返事も延引ニ相成、又々御案事遊され候半と被存候、今日ハ私より鳥渡御留主の御よふ子計申上度、御帰宅の上御自分様より何事も委敷御返事遊され候半と被存候、いろいろ御礼やら申上度事も海山御座候へとも、さしいそぎ此由のミあらあらめて度かしく。

五月一日

緒方老女

池田御夫婦様

尚々時こふ御用心専一ニ、御子達さま方御大切ニ祈上候、此度ハほんニほんニ私ハ夢のよふニ存、ま事ニ久ニテゆるゆるし候、御面会もして御着早々隠宅へ御つれ申て、朝夕おきふしも同じよふニして過し、事の御物語申上たり承りたり、こんな嬉敷事ハ御さなく候、何事も御安心遣され候、又めて度かしく

(1) 池田謙齋の養母 池田久子の事。薩摩士族家に文政12年生まれ昭和5年没。享年102。(1829-1930)

(2) 徳島に住む池田久子の妹吉田よし子の事か。この時期(4月21日付)池田謙齋宛に吉田よし子の義母吉田いしより、息子(よし子の夫)惟義死亡通知書簡あり。下記に記す。

5 明治13年4月21日 (2996)

(包み紙)

徳島県名東郡留田浦裏仲ノ町三百廿六番地

四月廿一日発ス

東京駿河台北甲賀町九番地

(欠) 齋様 吉田石 至急

(消印 東京・一三・四・□□・に)

文して申上まいらせ候、さては惟義事不快相勝不申候ニ付、種々手ヲ尽し養生いたし候得共、終ニ養生不相叶四月十九日午後七字五十分死去いたし候まゝ、為御知申上候、何分取込おり差急き代筆ヲ以要用まで申上度候、かしく

四月廿一日

吉田いし

池田謙齋様

鈴木景德様

岩本小平太様<sup>(1)</sup>

(1) 岩元小平太 池田久子の弟。実家左近允のまごんのじょう旧姓岩元家を継ぐ。

⑤ 緒方吉重の書簡

吉重は惟準の妻。父三沢良益・母佐藤泰然の娘きは次女として嘉永4年生まれ昭和2年没。元治元年江戸にて結婚。慶応4年4月義母八重子と大阪へ行く。惟準の新政府出仕に従い東京に住

む。明治11年より13年迄惟準の転任により大阪へ。再び惟準の転任で東京に移動。20年退官により大阪に永住する事となる。4男2女を育てる。享年77。(1851-1927)

1 明治10年8月10日 (637)

(封筒表) (欠) 壱町目十番地 池田様

駿河台 緒方

(消印 東京・十年・八・一一・ろ)

(封筒裏) 八月十日 午後八時

↗

(端裏書) 池田 御伯母様<sup>(1)</sup> 吉重より  
千代と御伺度願用まで文して申上まいらせ候、時分からとて御あつさきひ敷おわし候へ共、まつまつ其御惣よふ様御揃遊ハシ御機嫌よくいらせられ御めて度存上候、さやうニ御座候へハいつもいつもおなしよふなるかつてかましき事斗御伺申上、御多用さまの御中故呉々も恐入候へ共一寸御尋申上度、目尾様の御けいこ初メハもはやとふからす内ニハ存候へとも□私方ハしつかりとハ御伺不申居候故、もしやおきね様<sup>(2)</sup>ニ御伺申上候ハ、相しれ申候やと存、一寸御伺申度、御知承<sup>(ママ)</sup>ニいらせられ候ハ、誠ニ誠ニ恐入候へとも郵便にて一寸御聞せ戴度呉々も御願申上候、筆末乍御ミなミな様え宜敷々々御伝声願上まいらせ候、まつハ大いそき早々めて度かしく。

かへすかへすせつ角あつさ御いとみ御いとみ被遊候様願上まいらせ候、以上

(1) 池田謙齋の妻幾子<sup>いくこ</sup>の事。

(2) おきね 池田多仲<sup>おねこ</sup>3女甲子。後池田謙齋の妻となる。

2 明治 年 月 日 (633)

(前欠) 御礼かたかた御願申上度、昨夜ハ岸本<sup>(1)</sup>え御見舞戴有難御礼申上候、病人事引つゝき昨夜より今朝ニいたり様子あしく、一同心はい致居候まゝ、誠ニ誠ニ御多用中恐入候へ共、今朝御出きんまへニ一応見舞戴度、母よりも呉々も呉々も御願申上度申付候まゝ御くり合御見舞之程ひとへニひとへニ御願申上候、何も御願用迄、以上

↗

池田 御伯母様 願用

おかた

(1) 岸本(億川)一郎 緒方八重子の弟億川信哉の息子。嘉永2年生まれ明治11年7月30日没。幕末英国留学。舎密局にて紙幣用インキ製造に尽力。舎密局長。享年30。(1849-1878)

(注) この書簡は緒方吉重が池田幾子に宛てたもの。

3 明治 年 月 31日 (632)

(封筒表) 池田様 御奥 緒方内

(封筒裏) ↗

雨天ニ候得ハ順延候也。

先日ハ失敬御免可被下候、扱来月二日ニハいよいよすミタ川競漕有之候付午前十時迄ニ御出遊し度、尤御弁当ハ手当ニハ不及申、八百松え御出、私名前被仰候ハ、御都合申上候事ニ申置候間、左様御承知遊し度、尤車夫えも申付置候まゝ御見当り遊し候ハ、御案内申上まいらせ候、右申上置候、御庭拜見の御事鎌田え両度さし越候得共、逢不申、今日も差越逢候上何と敷申上候様いたし可申、左様思召可被下候、めて度かしく

三十一日

喜衛

御姉様 人々

謙齋様御病氣如何之御□□塩梅候哉、乍存御無沙汰さま申上候、よろしく被仰上被下度ねかひ上まいらせ候、めて度かしく

(注) この書簡は緒方吉重が池田幾子に宛てたもの。

3 明治(16)年12月 日 (638)

(封筒表) 駿河台 池田様 御願用 猿楽町緒方

(封筒裏) ↗

↗

(端裏書) おいく様 御願用 吉重より  
御願用かたかた御伺まで文して申上候、日増ニ御寒サつよく相成候へ共まつまつ御惣よふ様御揃御

機嫌克いらせられ御めて度存上候、左様に候へは  
 おいく様次郎様<sup>(1)</sup> 御事其後御不快はいかゝに  
 いらせられ候や、御案事申上居なからついつい御尋  
 も申上不申御ふさた斗申上恐入候、扱大坂表母事  
 またまた昨年のおふたいにて十五日比よりわるく  
 相成候由にて、一昨夜昨日と両度もテンシンにて  
 よわりつよく心配故一同参るよふト申来り候ニ  
 付、火急々々ニ惟準 周二郎昨日出ばんの船にて  
 参り申、ま事ニま事ニ火急の事にて御いとまこひ  
 ニもえ上り不申宜敷御断申上候様申付まいらせ  
 候、猶御願申上度、小兒知三郎<sup>(2)</sup> 事五六日前より  
 風邪致せきつよく出こまり居候処、前文申上候  
 通り兩人共出立致候ゆへ悴をま事ニま事ニ心配  
 致、此上わるく相成候てより御願申上候てもせん  
 なき事故、只今内一度御しんさつ御願申上呉ト  
 申、聞入不申、私ハさしたる事にハ存不申、ねつ  
 もかく別ハ出不申候、実ニ実ニ御多用の御中恐入  
 候へ共御都合にて御くり合戴、一度御しつさつ御  
 願申上度、私より願ニ上り候はつ乍私も少々風邪  
 致クシヤクシヤト申居、甚タ恐入候事ニ御さ候、  
 御まえ様よりよろしくよろしく御取なし御願戴度  
 願上まいらせ候、いつこふおしつめ申御多用呉々  
 も御さつし申上候、何も大いそぎ認御はんしよみ  
 願上候、めて度かしく、かへすかへすかしく

- (1) 次郎 池田謙齋の次男次郎。明治11年生  
 まれ昭和21年没。享年68。(1878-1946)  
 (2) 知三郎 緒方惟準3男。明治16年生まれ  
 昭和47年没。明治40年東大医学部卒業。病  
 理学者。東大医学部教授・東京医科大学理事  
 長歴任。享年89。(1883-1972)

4 明治 年 月 日 (631)  
 御返事かたかた御わひまで申上候、ま事ニま事ニ  
 きひ敷御寒さニ候へとも、まつまつ皆々様御揃遊  
 ハし御機嫌よくいらせられ候御事万々御めて度存  
 上まいらせ候、扱とや昨日は御使にて細々との御  
 文戴き有難折ふし御返事認メ候はつの処、少々客  
 来にて取込居申、返事も差出不申、御ゆるし被下  
 候、昨日には参上致候様御深切さまニ御まねき被  
 下御嬉敷、惟準事は廿一日頃の船にて帰京致候様

申参り候、昨日四郎ト整之介<sup>(1)</sup> 兩人丈帰京致申、  
 母事も段々と全快致候趣御安心被下候、右ニ付私  
 事上り度と楽しみ居まいらせ候、子持の事ニ候故  
 ま事ニま事ニ失礼斗致候まゝ、実ニ実ニ御気のと  
 くさまニ存上候間、前もつて御ゆるし戴度御願申  
 上候、いつれ参上万々御礼申上度候、御返事まで、  
 取いそぎめて度かしく

池田様 人々 緒方内

- (1) 整之介 緒方惟準の長男整之助。明治2年  
 生まれ。幼時より賢明で大学予備門試験に合  
 格したが病弱の為通学出来ず、22年結核性  
 脳膜炎にて没。享年20。(1869-1888)

#### ⑥ 緒方道平の書簡

妹尾道平は、緒方洪庵の義兄弟である緒方（大  
 戸）郁蔵の嗣養子として長女久重と結婚し、緒方  
 姓になる。弘化元年生まれ大正14年没。明治15  
 年地理寮山林課・山形・福岡県書記官。福岡農工  
 銀行頭取歴任。享年82。(1844-1925) 道平の3  
 男は朝日新聞副社長・吉田内閣副総理を勤めた緒  
 方竹虎。

1 明治16年8月4日 (655)  
 (封筒表) 池田大先生 閣下  
 (封筒裏) 緒方道平

炎暑難耐候処愈御盛奉謹賀候、陳は愚弟太郎<sup>(1)</sup>  
 義過日医学校学期相済、去ル廿七日秋田県え雇ハ  
 レ出起仕候、其前一応拝芝御見識り置相願度申居  
 候処、出起ニ際し妻ヲ迎へ候取込有之竟ニ不能其  
 義、且ツ文筆ニ不熟にて書状ヲモ呈し兼候ニ付、  
 小生より向後之所宜御含置奉願度申上候様申出居  
 候、右御聞置被下度、小生よりモ厚ク御依頼仕候、  
 右申上度如斯ニ御座候、匆々拜白

八月四日 緒方道平 拜  
 池田先生 閣下

- (1) 太郎 義父緒方郁蔵の長男。安政4年生ま  
 れ明治33年没。明治16年東大医学部卒業。  
 秋田・新潟医学校・富山病院長・緒方病院副

院長歴任。その後医院開業。享年44。(1857-1900)

2 明治 年7月23日 (652)

(封筒表) 池田謙齋先生 坐下拝答

(封筒裏) 〆 緒方道平

森島佐次郎氏は従来御懇意之趣、同氏山林課へ望有之云々本人ニ御托之尊書道平拜読仕候、然ルニ此義ハ過日五十風某より同人履歴書ヲ迂生ニ托され取次候処、其間不定廉有之、おかしく行違ヒ居候得ども好機ヲ以テ尽力可仕旨森島氏へ直々談し置候、先生之御懇意家ナル事ヲ四五日前も承知罷在候ハ、大ニ好都合ナリシニと本人え委細申含置候事ニ候、尚拝眉可申上候、匆匆肅白

七月廿三日 緒方道平  
池田先生 閣下

3 明治 年12月30日 (653)

倍御多祥奉賀候、愚母義御蔭ニテ追々快方ニ趣候段奉深謝候、聊謝義之微意ヲ表ル為メ別封拾五円呈上之仕候、御納被下候ハ、幸甚此事ニ候、敬白  
十二月卅日 緒方道平  
謙齋池田先生

4 明治 年7月24日 (654)

不相変東西奔走罷在、乍思意外之御無音恐縮此事ニ御座候、偕 過頃来ハ愚母并ニ愚父共御治療ヲ以非常之大患モ速ニ全快仕候段謹テ奉厚謝候、由テ甚薄儀汗顔之至候得共

金 四拾円 老国手  
金 八円 小原君  
金 貳円 入澤君

聊微意ヲ表スル迄呈上仕候、御受納被下候ハ、幸甚无是候、敬白

七月廿四日 緒方道平  
学士謙齋池田老国手 閣下

5 明治 年11月24日 (656)

(封筒表) 池田様 御礼

(封筒裏) 〆 緒方道平 (榛原紙)

美事之品御見回として御恵み下され難有拝納仕

候、尚拝眉万々可申上候、匆匆

十一月廿四日

緒方

池田様

⑦ 緒方家執事の書簡

1 明治 年6月16日 (3109)

昨日御願申おき候人力車、今日車夫を以て借用に差上申候間、お手数ながら御渡し被下度、此段奉願上候也

六月十六日 緒方執事  
池田様 執事

2 明治 年10月20日 (3110)

御上様えよろしく被仰上被下度候也、以上略啓、御家内様倍御機嫌克可被為入奉欣賀候、陳ハ御大切之御品拝借仕居、早速返上可仕所大ニ遅淹仕御使ニ預り傷入候、乍失敬御使ニ托し候間御受取被下度候、余ハ参殿之節可申上候、先ハ右まで早々頓首

十月廿日 緒方執事  
池田様 執事御中  
碁盤老面 但し碁笥老組添 □□とも

〆  
池田様 執事御中 緒方執事

⑧ 差出人不明なるも緒方家関連書簡として掲載する。

1 明治 年 月 日 (3346)

(欠) 閣下

別封五円ハ薄謝恐縮ニ候得共、御代診大原君え御渡奉希候、迂生義昨日帰京仕候、緒方重三郎一件ニ付、必御高案一応御伺申上度存候、願ハ三日之内何頃参上仕候ハ、御在宅カ御一左右奉希候、再拜

[35] 緒方拙齋の書簡

緒方拙齋は蘭方医で緒方洪庵の適塾を受け継ぐ。拙齋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に4通掲載に付省略。



[36] 緒方正規<sup>まさのり</sup>の書簡

緒方正規は嘉永6年熊本生まれ大正8年没。明治大正期の細菌・衛生学者。帝大医科大学教授・同大学々長歴任。享年67。（1853-1919）

1 明治39年3月5日 (612)

拝啓、時下愈御多祥ノ段奉欣賀候、陳バ拙者儀、来ル三月十一日（日曜）午后壺時ヨリ東京帝国大学医科大学衛生学教室ニ開催スル第四回日本衛生学会ニ於テ

一、恙蟲（毛蟲）病病原研究第二回報告ヲ発表仕候ニツキ御多用ノ折柄御迷惑ニ存候へ共、御貴臨ノ栄ヲ賜ハリ御清聴ヲ煩ハスヲ得バ本懐ノ至ニ奉存候、右御案内マデ如斯ニ候、勿々不宜

明治三十九年三月五日

医学博士 緒方正規

男爵 池田謙齋殿

## [37] 岡本元資の書簡

岡本元資は天保13年生まれ。明治16年より35年まで侍医局勤務（職名）を勤める。

1 明治 年 月 27日 (3205)

御安康奉賀候、午前十時之御体温三十八度六分、只今十二時之温度三十九度壺分ニ被為在候、正午ニては昨日と御同様ニ被為入候事ニ御座候、何も外ニ御異状無之候、此段草々申上候也

廿七日正午

元資

池田先生 拜上

2 明治 年 7月 21日 (3206)

益御清榮奉賀候、入土用漸々相応之時候（欠）共□□ニ（欠）少暑中御様体何迄ニ呈上仕度、御笑留被下候ハ、大慶之至り奉存候、此段草略申上度、頓首

七月廿一日

元資

池田先生

3 明治 年 7月 21日 (3207)

謹啓、益御揃被遊御坐、御機嫌克被為入候御事恐悦之御事ニ奉存候、入土用格別昨今ハ時候相応ニ

相成候事ニ御坐候、此疎末なる品赤面之至りニ御坐候候得共、暑中御様体奉伺度呈遣仕候、御笑留被下候ハ、大慶之至りニ御坐候、此段早々得貴意度、如此御坐候、頓首

七月廿一日

元資 拜

池田先生 呈上

## [38] 小原（竹井）静の書簡

小原静は池田謙齋の門下生。明治21年より侍医局医員を勤める、静の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に7通掲載した。未掲載分を記す。

8 明治 年 3月 22日 (3113)

拝呈、昨夜十一字頃富沢町丁子屋治平より、此迄御診察相願居候病人、突然煩悶ヲ起シ候ニ付至急御来診願度申来候ニ付、小生見舞候旨申遣候処、跡より少々寛解致候ニ付今晚之処は見合せ呉候之由ニ付見舞不申候処、又々今朝ニ至り先生ニ御来診願度申来候間、御繰合せ御往診被下度、右申上度如此ニ御座候、頓首謹言

三月廿二日

小原静

池田先生 尊閣下

## [39] 賀川満載の書簡

賀川満載は産科医。明治10年より侍医局医員を勤める。満載の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に9通掲載した。未掲載分を記す。

10 明治（10）年 9月 6日 (3315)

早蕨典侍<sup>(1)</sup> 容体昨午後六時頃ヨリ小腹胸部攣痛、十時頃迄甚シク午前二時頃ヨリ少々は緩解候得共、時々攣痛故眠不安、今七時頃ヨリ痛ミ甚しく今ニ不止、大便は今ニ不通、仍て此段至急申上候也

九月六日 午前八時前

御産所ニて満載

池田大先生

(1) 早蕨典侍<sup>さわらびのてんじ</sup> 柳原愛子<sup>なるこ</sup>。大正天皇生母。明治10年9月23日第2皇子建宮敬仁親王<sup>ゆきひと</sup>誕生の時のものか。

## [40] 欠下友造及び父友甫の書簡

欠下友造の経歴不明なるも書簡の内容から医師と思われる。

## 1 明治23年5月1日 (1571)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九番地

池田謙齋様 閣下 親展

(消印) 武蔵東京廿三年五月五日□便)

(封筒裏) 封 五月一日 陸中国宮古港鰍ヶ崎町

欠下友造 拜

(消印) 陸中国宮古廿三年五月二日)

拜啓、時候柄不順之節ニ御座候処、御道中御滞モ不被為在御機嫌能御帰京被遊奉恐賀候、陳ハ先生御留守中之処、愚父大病之旨再三電報有之候得共、先生御不在ニ付御帰京之上帰省可仕所存ニテ折角御待申上候処、又々電報ニ接シ不止得御不在ヲモ不顧帰省仕候段、平ニ御仁免被下置度候、扱愚父病症之儀ハ慢性気管支肺炎ニテ当時之所ニテハ朝夕咳嗽咯痰頻発シ熱発ハ無御座、兎角食氣不振且ツ老年之事ニ御座候得バ衰弱甚シク本復之程ハ覚束ナク存候、去リ迫急ニ病死等之患ヒモ無之ト奉存候、右之次第ニ付三四週間モ滞在看護之上容体篤ト見極メ出京仕度候間、何卒不相變御引立之程奉願上候、頓首敬白

五月一日

欠下友造

池田先生閣下

二白、大略右之通り之容体ニ付、左之薬剂相用ヒ居リ候得共、他ニ宜シキ御(案)有之候ハ、御教示 奉願上候、尤モ時々容体申上候

一、キナ丁幾 六・〇

稀塩酸 十滴

水 一〇〇・〇

右一日三次分服

兼用ヒヨスエキス相用ヒ度候、只今持合無御座候ニ付

一、塩莫非 〇・〇一

葛粉 〇・二

右散薬一包咳嗽尤モ強キ節ニ頓服右(後欠)

## 2 明治 年1月26日 (1644)

御繁忙之折柄昨日ハ御尊来被下難有奉存候、御隠居様昨夜来今朝ニ至リ平常之通り御機嫌能御下<sup>(ママ)</sup>利止み、更ニ御変状無御座候、就テ明日ハ大臣始メ奥様本邸御滞留ニモ御座候ヘバ若し御間<sup>(ママ)</sup>暇御座候ハ、御光来之程奉願上候、草々敬白

一月廿六日

欠下友造

池田大先生 閣下

## 3 明治18年8月26日 (1643)

一筆奉啓上候、残暑之候未タ不得拜顔候得共御家族様御揃益御機嫌能可被遊御坐奉恐悦候、随テ小子無事消光罷有候間乍憚御安心被下度候、陳ハ倅友造事種々御厚情被成下難有仕合筆紙難尽候得共御礼申上候、殊ニ又為補養日光迄モ御遣被下御厚情之程難有仕合奉存候、誠ニ虚弱性ト云不行届之者ニ御坐候間何卒先生之御添慮御引立被下候様小子よりも伏テ奉願候、右時候御機嫌伺方段々之御厚礼迄申上度、猶後便ト相讓候、以上

十八年八月廿六日

欠下友甫

謙齋様

二白申上候、陳ハ乍末筆恐入候得共御家族様えもよろしく奉願上候

## [主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行

霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成』上・下巻 霞会館 1984年4月10日発行

池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋』上・下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行

遠藤正治著「明治期の侍医制度と池田文書」『東と西の医療文化』吉田忠・深瀬泰旦編より 思文閣出版 2001年5月11日発行

緒方富雄著『緒方系譜考』緒方銈次郎 1926年3月28日発行

中山沃著『緒方惟準伝一緒方家の人々とその周辺一』思文閣出版 2012年3月30日発行